

令和7年12月3日

鳥取市議会議長 星見 健蔵 様

議会広報広聴委員会
委員長 加藤 茂樹

令和7年度鳥取市議会 議会報告会・意見交換会報告書

このことについて、開催状況等の取りまとめを行いましたので、次のとおり報告します。

1 開催概要について

公募により参加団体を募集し、応募のあった「～対話と学びとつながりと～ど
んぐりの森」の皆さまとの「議会報告会・意見交換会」を開催しました。

(1) 日時 令和7年11月10日(月)10時00分～11時30分

(2) 場所 鳥取市役所本庁舎7階委員会室

(3) 参加者 市民12名、議員14名

(4) 日程

①開会

②議会報告

③意見交換

④発表

⑤議員謝辞

⑥閉会

(5) 意見交換テーマ

【こどもの居場所について】

①フリースクールだけでなく、地域の居場所を確保することについて

【不登校保護者の孤立予防・支援について】

②不登校に関する理解と対応

③全保護者への情報提供

④親の会と行政・公的機関との連携について

会場の様子

議会報告



意見交換



意見交換



発表



2 議会報告会について

議会の概要について説明を行うとともに、令和7年度予算と令和6年度決算について、各審査特別委員会の委員長報告で取り上げた内容について報告しました。

3 意見交換会について

2班に分かれて実施し、進行役議員を中心に話しやすい雰囲気作りに努め、ホワイトボードや模造紙、付箋を活用しながら行いました。

参加者からは日常で感じている事柄などを直接聴くことができ、さらに改善するための提案などをいただき、大変有意義な会となりました。

4 今後の課題について

市内で活動する団体を対象に参加団体を募集しましたが、1団体しか応募がありませんでした。今後、より多くの市民の参加が図られるよう開催方法や周知方法など改善に向けて検討する必要があると考えます。

5 意見・要望等について

意見交換でいただいた意見・要望等については、全議員で共有し、今後の議会・議員活動に活かしてまいります。

添付資料

- ① 令和7年度鳥取市議会 議会報告会・意見交換会報告書(A、Bグループ)
- ② 令和7年度議会報告会・意見交換会アンケート集計

「鳥取市議会 議会報告会・意見交換会」報告書【Aグループ】

このことについて、下記のとおり報告します。

テーマ	不登校児童生徒及び保護者支援の充実と地域連携について
担当議員名	水口 誠、西尾 彰仁、中山 明保、西村 紳一郎、 平野 真理子、砂田 典男
意見・要望等	<p>【子供の居場所について】</p> <p>① フリースクールだけでなく、地域の居場所を確保することについて</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○利用できる「フリースクール」の数が少ない。 ○子どもが自分で歩いて行ける所に居場所が無い。 ○利用料金の負担がある。 ○親の送迎に負担がある。 ○親の仕事を調整しないといけないことが負担。 ○「すなはま」しか知らない。(情報が無い) ○親が働きに出ると留守の間、ゲーム三昧！ ○「フリースクール」が合わなかった。 <p>【要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○公民館や総合支所の空き部屋など、既存の公共スペースを居場所として活用できないかどうか。 ○親子が外で過ごせる場所づくりのための「プレーパーク」の運営をしているが補助金が必要。 ○図書館で平日も子どもがいても違和感のないように、地域社会全体で不登校に対する理解を深めてもらいたい。 ○保護者や関係者がアクセスしやすいよう、利用可能な居場所や支援に関する情報を行政から、明確に伝えてもらいたい。 ○子どもが家から出られない為、訪問サービスがあったら

いい。

○発達障がい児の支援が必要。

○毎日通えなくても、オンラインでの学びの機会があったらいい。

【意見】

○フリースクール・放課後児童クラブの運営者側の要望として、様々な支援を考えているが、費用面、また人手が必要。

○行政の支援が必要。

○居場所が沢山あることに越したことはないが、場所と人の問題があるので、廃校などを活用してはどうか。

【不登校保護者の孤立予防・支援について】

② 不登校に関する理解と対応

【課題】

○単に学校に戻すだけでは解決しない現状がある。

○母親以外の家族の理解が進みにくい。

○不登校の子どもに対する学校の友だち、地域の大人の理解が難しかった。自分が話せる人が欲しかった。

○専門家の意見が重視され、本人や親のことは聞いてもらえなかった。(自分たちでなんとかしろといわれた)

○受診をしないと支援が受けられない。

○学校行事に出ないと、居場所がなくなる。(選択肢もない)

【要望】

○親の授業中の別室待機。

○医師を含めた面談。

○学校や教育委員会との連携。

○親の教室までの付き添い登校。

○学校以外の居場所や選択肢が必要。

○学校や教育委員会だけでなく、地域全体で居場所を提供し、当事者が「戻れる」と感じられる環境づくりが必要。

○保護者や教師だけで抱え込まず、スクールソーシャルワーカー (SSW) などの専門家の意見を取り入れ、チームで支える体制が重要。

○不登校の初期段階の学校の対応に不信感を持った。

【意見】

○学校と保護者だけではこじれる場合があり、専門的な知識に基づいた対応が、当事者の適切な支援につながるとい

った意見があった。

- 「確かな情報」や「当事者の声」が十分に発信されていない現状があり、当事者の経験や意見を積極的に取り上げ、共有することが大切であるといった意見があった。
- 保護者向けの会などを通じて、経験者が意見交換できる場の提供も有効だという意見もあった。
- 不登校の対応において、従来の「学校中心」の考え方を見直し、多様な居場所や専門家との連携、当事者の声を重視することの重要性があるとの意見があった。
- 不登校の問題を個人の責任ではなく、社会全体で受け止め、柔軟で多様な支援体制が必要との意見があった。

③ 全保護者への情報提供

【課題】

- 保護者が情報を得にくく、孤立しがちであるという現状が多くあった。
- 「声をあげられているうちはまだ良い」という誤認があり、深刻化してからでないと支援に繋がらない。
- フリースクールやその他の支援にかかる経済的負担が大きい。
- 不登校になった子どもの対応が判らず困った。苦しかった。

【要望】

- 保護者は学校や行政からのわかりやすいリーフレット提供など、積極的な情報発信が必要。
- 保護者から現在の状況等を積極的に聞き取り、把握するための体制が必要。
- 保護者間の情報交換や交流など不安や悩みを共有できる場所の情報発信が必要。(鳥取市子ども発達支援センターの「いっぽいっぽのつながり」など) ホームページや市報等を活用して情報発信をして欲しいといった意見があった。

【意見】

- フリースクールなど、学校以外の選択肢に関する情報も保護者にとって重要であるとの意見があった。
- 不登校に関する保護者の不安や情報不足を解消し、学校や行政がより積極的に関与していく必要がある。
- 「情報発信されない」といった意見もあり行政・公的機関からの情報提供が不足しているといった意見もあった。

	<p>④ 親の会と行政・公的機関との連携について</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○親の会はボランティアで運営されており、行政・公的機関との連携について不十分。 ○不登校の子どもを持つ親が「親の会」があっても行き場のない人も多く、孤立しがちであり、支援の必要性が切実である。 ○解決に導いてくれるような提案や具体的な支援が得られない。 <p>【要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○孤立を防ぎ継続的な情報提供を行うため、「定期的に意見交換などできる場が欲しい」という要望があった。 ○行政の窓口がそれぞれ独立しており、同じ話を何度もする必要があるので、何とかして欲しい。 ○「親の会」は親だけの参加なので、余計な混乱や分断が生まれることもあるので、行政や第3者の介入も必要。 ○子どもや親もプラットフォームを作るなどして、不登校に関する情報を得たり学んだりする機会や場所が必要。 <p>【意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○不登校支援においては、親の会と行政・公的機関が連携し、孤立しがちな親子のための学びの場や情報提供のプラットフォームを定期的に提供することが求められている。 ○「親の会」と繋がれて、私（親）が安心した。ここで情報を得ることができるのも助かる。
<p>所 見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○居場所としての地区公民館の利用、情報共有や親の会がアクセスできるプラットホームの構築を図る ○「いっぽいっぽ」の周知や市報への掲載。 ○教育と福祉と医療の連携を強化していくこと。 ○不登校に関する地域社会の理解を深めていくことが大事。 ○意見交換会では沢山の意見があり勉強になった。この様な意見交換会を継続的に行うべきと考える。

「鳥取市議会 議会報告会・意見交換会」報告書【Bグループ】

このことについて、下記のとおり報告します。

<p>テーマ</p>	<p>不登校児童生徒及び保護者支援の充実と地域連携について</p>
<p>担当議員名</p>	<p>柳 大地、岡田 実、金田 靖典、岩永 安子、長坂 則翁、岡田 信俊</p>
<p>意見・要望等</p>	<p>1. 日 時 令和 7 年 1 1 月 1 0 日 (月) 2. 場 所 鳥取市役所本庁舎 7 階 3. 参加者 どんぐりの森の皆さん 4. テーマ 【こどもの居場所について】 ①フリースクールだけでなく、地域の居場所を確保することについて 【不登校保護者の孤立予防・支援について】 ②不登校に関する理解と対応 ③全保護者への情報提供 ④親の会と行政・公的機関との連携について 5. 意見交換内容 付箋ワークにて参加者及び議員の意見を模造紙に貼った後、主に参加者の意見に傾聴する姿勢で意見交換をおこなった。 参加者が話してくださった御意見は、センシティブな内容であるため、付箋ワーク、意見交換の発言をできるだけ拾い上げたいため、別紙にて議事録形式で報告します。 【別紙参照】 令和 7 年度 鳥取市議会 議会報告会・意見交換会 議事</p>
<p>所 見</p>	<p>近年急激に増加する不登校の児童生徒の問題について、参加された親の皆様から多くの意見をいただいた中で、特に共通して対応を急がれている内容は以下のとおり。 ①不登校初期段階への対応 要望として、学校に対して、先生だけではなくアドバイザー等により、医療、福祉、教育（フリースクールなど）、その他の相談先、親の交流の場などへ繋げる情報を保護者へ伝え、子どもの居場所と将来を考えられる環</p>

境づくりを求めている。苦勞されてきたことは、子どもが学校へ行きづらくなった時、まだ不登校かどうか明確ではない段階で、まず先生へ相談してきたが、先生の対応がまちまちであり、先生の言葉に対して不信感をもってきたこと、そして子どもに何をしてあげていいかわからない状況が続き、次第に親自身も孤独・孤立感を強く感じてきたと話された。

②家で過ごしている子どもに対する支援

今なお学校へ行けなくなって孤立している子ども、さらに孤立している親も多い。また、子どものために職場の勤務時間の短縮や辞めざるを得ない状況となり、経済的な困難に陥っている家庭がある。参加した親の声は、行政から家庭へ積極的にアプローチし、その家庭にあったアウトリーチ型の支援を求めている。

－以上－

(別紙)

令和7年度 鳥取市議会 議会報告会・意見交換会 議事【Bグループ】

日 時 令和7年11月10日(月)

10時から11時30分まで

場 所 鳥取市役所本庁舎7階

議 員 柳、岡田実、金田、岩永、長坂、岡田信

参加者 Bグループ6名

■どんぐりの森 代表者 挨拶

- ・いつか、不登校の会として声をあげなければと思っていた。その理由は3つある。
 - ①新聞報道でいう不登校の原因は、私がどんぐりの森で聞いてきた「親の思っていることと違う」のではないかと思っている。この実情をわかってもらいたくてこの度、意見交換会へ申し込んだ。
 - ②親の会をやり続けて思ってきたことは、本当に苦しんでいる親が多い。親自身のカウンセリングが必要でありながら、親も繋がっていない。一人親家庭、経済に困難な家庭が増えている。したがって、不登校問題は、親による子への共助を話し合う、聞きあうだけではなく、親も助けて・・・という思いで本日来た。
 - ③不登校の問題は、学校へ行くか行かないかという問題だけではなく、自殺する子が増えている。自殺に至らなくても死にたいと思っている子がどんなに多いことか。そうした子を救ってあげたい。

■付箋ワーク

それぞれのテーマについて、「課題」と「アイデア」に分けて付箋を貼り付けた。

【こどもの居場所について】

- ①フリースクールだけでなく、地域の居場所を確保することについて

「課題」

- ・命を守るシェルター。
- ・気軽に寄れるところ。
- ・家で過ごしている子に支援が行き届くようにしてほしい(医療、福祉、教育など)。

「アイデア」

- ・近いところに居場所が必要。
- ・子ども食堂の延長。
- ・公民館の解放。
- ・校舎内に保健室ではなく居場所がほしい。

- ・子どもの居場所づくりに地区公民館という話があるが、関係機関との事前協議が必要。

【不登校保護者の孤立予防・支援について】

②不登校に関する理解と対応

「課題」

- ・教育での良いこと、正しいことは不登校の子を苦しめる基本的な生活習慣、ゲームしほうだい、昼夜逆転、勉強を全くしない。→こうしたことへ理解必要（精神医療、福祉の域）。
- ・教育（小学校）の中心に子どもを置いてほしい。
- ・不登校の子を信じてみてほしい。それがその子のパワーになる。
- ・学校に戻るだけがゴールではない。
- ・学校へ行けない事を問題としないでほしい。行けない子が苦しむから。
- ・不登校は、怠けやわがままではないということの共通認識が必要、社会問題である。
- ・支援会議で決まった支援がほとんどされなかった。病院の先生から学校への意見書が受け入れてもらえなかったことがある。
- ・PTSD になったのは、先生や学校の責任ではなく、あなたの子供が弱いから、弱い子どもに育てた親の責任と学校の先生に言われた。
- ・対応が的外れ過ぎる。
- ・戦後のような学校教育はもうやめてほしい。令和のやり方に思い切って変わってほしい。
- ・がんばって学校に行ったのに、「今日はあなたの居場所がないので帰ってもいいし、どうしても居たかったら、どこか部屋を用意するけど忙しくて対応できる先生がいないので、お母さんと二人で過ごして下さい」と言われ、悲しかったし、悔しいし、なんとも言えない気持ちで子どもと帰りました。
- ・自分の気持ちに正直なのは悪いことではない。
- ・母親のストレス。
- ・保護者が仕事を辞めなくてはならない。→貧困
- ・勉強でわからないところを聞いたところ「今無理」とか「何回言ったらわかるの」、「どうでもいいわ」、「もう知らん」など言われ、勉強についていけず、不登校の原因の一つになっている。
- ・先生の対応について学校に相談していましたが、解決に至らず教育委員会に相談したところ、市は県に、県は市に最終的に、校長先生にとたらい回しにされ、結局解決に至ることは無く、心を痛めたまま卒業（小学校）しました。
- ・先生の言動で子どもが辛い思いをしているのに、子どもに寄り添ったり助けてくれたりすることがあまりなく、先生をかばうことばかり言われ悔しい思いをした。

「アイデア」

- ・学校へ子どもがしんどくなっていけなくなった時の対応を学校に適切にお願いしたい。
- ・不登校の体験（経験）を聞くこと。
- ・不登校になっている子や親の声に、耳を傾けてほしい。これからの学校のスタイルの大きなヒントになるはず。
- ・「生きているだけで ALL Ok」ってみんなで信じたい。

- ・不登校になった時、学校側からフリースクール、医療などの情報をお願いしたい。
- ・不登校になった子どもの対応に困っている先生もおられるので、親、外の医療の方の意見も受け入れてほしい。
- ・学校に、医療、作業療法士などの専門の方の採用をお願いします。
- ・学校給食を気軽に止めたり、始めたり、曜日を選べるようにしてほしい。
- ・親と子どもの精神医療としてのカウンセリングをする。
- ・不登校になったときに親身に対応してくれた先生も中にはおられる。
- ・支援学級の適切な対応をどの学校も一律にしてほしい。
- ・教育委員会の解決と、保護者側の解決の違いが大きい。

3 全保護者への情報提供

「課題」

- ・特性のある子の不登校の場合の適切なアドバイザーがない。
- ・小学校入学前に支援学級の見学をさせて頂いた際、勝手に帰って下さいと言われ、何の説明もなかったので、どのクラスにしますかと聞かれても分からなくて困った。
- ・不登校のこのアドバイスの（家庭での子どもとの接し方）を教えてくれたところがなかった。相談場所もない。
- ・グチを言いたいのではない。どうしたら助けてくれる場所へ行けるのか？
- ・たらい回し疲労。
- ・不登校の子に有益な情報は見つけるのが大変。

「アイデア」

- ・発達障害+不登校に対する専門的アドバイスが必要なのにない。（本を買った 著者：本田秀夫）
- ・おんせんキャンパスのような場やリーフレットが必要。
- ・不登校のことをどこに相談していいのかわからない。いろいろな所を相談してまわった。不登校の相談窓口を明確に。
- ・孤立せず社会との繋がりをキープ。
- ・フリースクール利用助成制度をご存知ですか？
- ・入学式こそ！ 学校×〇〇の信頼感。
- ・子どもの将来を考える場。
- ・学校をサポートして下さっている方々からの声掛けがとてもありがたかったです。
- ・親の会にたどりつけた。（たんぽぽの会、らっきょう花の会、米子の元気になる会）、不安に共感してもらえた。親の会が認知されることは必要。
- ・親の会の方に声をかけて頂いて、参加して、共感してもらえたり、知らなかった情報を教えていただけただけが嬉しかったし、助けられました。
- ・子どもの権利など、法について知らせる。

4 親の会と行政・公的機関との連携について

「課題」

- ・フリースクール補助金、すべての子、どんな家庭でも通えられるように、無償化を目指していきたい。
- ・仕事をする事が出来ず、主人の収入と子ども手当だけで生活、家計がとても苦しい。
- ・フリースクールの家庭への補助金、上限2万円か2/3の金額の低い方。なぜ？改善された人と改悪された人がいるから。
- ・学習の遅れ（保・障）
- ・親の会への参加。少しハードルがある。どのような団体かちょっと不安。→公的な案内も必要。
- ・普通を選択肢に小（中）学校しかないことが問題。フリースクール、フリースクーリングなども普通に選べると不登校が減るのでは。
- ・全体像の把握。
- ・不登校で困り始めたとき、転校が一切ダメで「驚いた」。
- ・体験の格差
- ・自殺する子、生きづらさをかかえている子がたくさんいる日本。根本的に何がそれを導いているのか。
- ・自殺する子どもが増えていることに、この異常さにもっともっともっと気づいてほしい。
- ・フリースクールなど子どもの居場所があるけれど、家計が苦しいので利用できない。

「アイデア」

- ・フリースクールが週5回、開室できるように行政で助けてほしい。
- ・ホームスクーリングにも金銭的な支援を。
- ・子どもの不登校で仕事につくことができず家計が苦しい中、子ども食堂（週2回）やNPO法人（週2～3回）の支援がとてもありがたいです。
- ・支援センターとの意見交換会
- ・アウトリーチ。
- ・ソーシャルワーカーの活用。
- ・困り感を抱える子ども家庭への支援、検診後、診断後の継続的なサポート。
- ・子どもの気持ち、親の気持ちをわかってください。病院の先生とリハビリの先生に出会えて助けられた。
- ・公教育における特別支援のスキルが不十分。スキルアップが必要。
- ・スクールカウンセラーだけでなく、アドバイザーも必要。

■参加者からの意見

【保護者が仕事を辞めなくてはならない現状と今後の支援について】

（親）

- ・保護者が仕事を辞めなくてはならないことがあるが、辞めることが逆に子どもの負担になる。保護者は辞めたくないけど、辞めないとフリースクールの送迎ができない。幼い子どもがいると家に居ないといけないということで、フルタイムをパートタイムにしなければならない。都会であれば休むための

不登校子供支援休暇があるのだそうで辞めずに済む。仕事を続けられるようになればいいが現実には辞めなければならない。

(A 議員)

- ・ 補足すると学校ではまず生徒が保健室に来るようになる。保健室では1時間しかいられないので親へ迎えの連絡をする。そしてその頻度が多くなる。親は始めのうちは有給休暇をとってくるが、ひどくなると常勤だったものを非常勤にして、さらに子どもが心配になると仕事を辞めて、そして経済的に貧困になってしまう。そこを何とかできるためのサポート体制がとれるようになればと思う。

(B 議員)

- ・ 不登校問題はただ単に怠けや本人のサボリだけではないと共通認識を持つことが大事。社会問題と捉える。文科省や子ども家庭庁は取組みはしているが、国会の中で不登校問題について議論していく。課題解決も個別の小さい課題が多く出てきたりするので、国民世論を巻き込んだ取組みをしていかないといけない。社会問題化させることが大事。

【家にいる子への支援、フリースクールに通うための、繋がるための支援について】

(親)

- ・ 私の子は、フリースクールに繋がるまでにそれぞれ2年くらいかかった。その間、医療と福祉に繋がって過ごしてきた。うちの子どもはまだ小さくて外へ引っ張ってでられたので良かったが、やはり年を重ねるとなかなか家から出られない子どもがいるという現状がある。そうなると、家では医療、福祉、教育に繋がれないことがもったいない。その子の大切な魅力を消してしまっていることになり、日本の未来にとってももったいないと思う。そのため、どんどん家庭にも突っ込んでいってほしい。

(A 議員)

- ・ フリースクールに繋がるまで2年かかったその理由は？

(親)

- ・ 通えなくなる瞬間って、下の子は幼稚園の年中で、上の子は小1だったんですが、大きく心が傷ついたからです。その原因としては、「通わないことが悪いことだ」という社会全体の考え」が子どもにいくため、子どもたちは、行かない自分を傷つけてしまうことが、最初の大きな問題と思っている。そこから立ち直るといふか元気を出すのに2年かかった。
- ・ 保育園で傷ついたことも原因だけど、傷つくというのは学校や保育園に通えないということ自体を大人たちが、世間が問題視していることに傷つく。それは自分の存在が傷つくといふか認めてほしい気持ち。

(親)

- ・ それは、自分は駄目な人間ということをして1回は自己否定すること。理解が無いからおじいちゃんやおばあちゃんにも怒られるし、先生に怒られるし、そのことで自分はもう駄目な人間だと思ひ、出ていけなくなる。だから次に向かうための充電期間が必要で、その充電してる間、ほっとかれることがいいのかということで、行政によるアウトリーチで、出てこれない子たちに対し、こっちから向かっていく（アプローチする）システムがあってほしい。

(親)

- ・ フリースクールまで行けない人たちの支援がいる。お金がなくても送迎がなくても行ける場所がまず

必要ということが一番だと思う。その地域の、目の前に居場所があったとしても、そこまでも行く元気がない子もいるということ、それがなんとかならないかなと思う。

(親)

- ・家で過ごしている子への支援が無いということが実際に起こって行って、多分、家で過ごしている子の半分以上は支援に繋がっていない。国のデータから見ても、多分鳥取県もそうだと思う。それは同時に孤立孤独の部分に繋がってしまうこともあるため、県の孤立孤独対策課へも行った。
- ・義務教育まではあえて学校で繋がっているけど、それ以降にどこにも繋がっていない人は、もう繋がりが無くなってしまう。それは大きな問題だと思う。では、何をしたらいいのかなって考えたとき、学校を通すことがいいかどうかわからないが、誰か公的なところが、その家庭のことを把握するってことが大事である。そしてその家庭のことを把握するためのツールって何かあるかなと考えたとき、個別の支援計画がある。そのことについて、今は支援級に通っていたり、養護学校に通っている子のためにあるけれども、県の教育委員会の特別支援課に聞いたところ、不登校の子どもの支援計画も作れるという。というか作らなければならないと文科省は言っている。けれどそれは鳥取県の中では全く聞いたことはない。せめてその場でこの家庭はどこに繋がっているのかの把握をして欲しい。そして繋がっていない家庭は繋ぐ。そしてこの課題は4番の課題「親の会と行政・公的期間との連携について」になるかなと思う。

【市教育センター、県教育委員会との意見交換について】

(B 議員)

- ・鳥取市の総合教育センターとの意見交換会は定期的に行っていますか？

(親)

- ・民間のフリースクールを取った人とはしている。けれど、フリースクールへ行ってない人とはない。

(B 議員)

- ・保護者との意見交換はありますか？

(親)

- ・保護者とはないです。

(B 議員)

- ・鳥取市の不登校問題の担当部局は総合教育センターが基本になってるため、不登校で悩んでおられる皆さんと共通認識をする意味でも、定期的な意見交換会をやる方がいいことではないかと思う。

(親)

- ・県の方でも教育委員会の特別支援課と子ども家庭課の意見交換会があるので、そこへも依頼を出してみようかと思っている。そして1団体がタイトに話してもらえる機会を設けてもらえるのか設けてもらえないのかということについて初調整みたいに思っている。
- ・市の方からもお願いしてもらえれば、行政からの意見があれば、親の意見が通りやすいかと思う。

【孤独孤立とならないために、もっとこうしてもらいたかった事について】

(親)

- ・学校に来いということではなく、「こんなところがあるよ」といった情報がほしかった。

(親)

- ・不登校について学校に相談していたとき、最初は何回も毎日のように毎週のように、先生が家に来た。でも、先生が来るというだけで、もう子供はもうガタガタ震えて、奥の部屋に入ってしまう。とにかく人の気配が怖い。ところが学校の先生も業務のタスクの一つとして毎週のように同じ時間に来た。それが子供にとっては怖いので、その気持ちを気づいて欲しい、距離をちょっと詰め過ぎるところがあるので、そのことを担任の先生に伝えた。
- ・ところが先生はそこで留めて他に伝えていない。そのため校長先生に聞いたときそんな話聞いてませんということも多くあった。もみ消しというのか、言い方もあるが、繋ぎたくないんだろかと、こちらが不信感を持ってしまって、どうしても頼るところは学校じゃないとなり、やはり他のところに行ったりする。
- ・これはやはり孤立しやすい一つの原因。こちらの気持ちは学校へ伝わらないし、学校へ行っても「なんかそうですか」で終わる。このことが結構ずっとモヤモヤしていて、やはり子供もその気持ちがわかる。
- ・校長先生が替わっていろいろお話を聞いてくれるけど、子供としてはもう怖い、もう行きたくない、顔も見たくないとなる。なので、そのことを先生方に少しでも理解してほしい。そして繋げるような気持ちを持って欲しい。

(親)

- ・下の子供が PTSD を発症している。そのことで学校側から県の教育センターや、市の教育センターを紹介された。そして県・市に話をしたけれど、県は市に行ってください、市は県に行ってください、最終的に校長に話してくださいと、たらい回し状態で解決しないままである。そのため、他のところにも頼れるところがあったらそういう情報は知りたい。ただ、県とか市が理解してくださるのが一番いいと思う。

(親)

- ・一番上の長男の子の9年間の義務教育を今振り返ると、学校に行かせない方がよかったかもしれないと思うくらいである。本人は、今はしんどくて死にたいぐらいまで言っている状態になってる。この子は小さい時から集団に馴染めず、幼稚園の頃、自閉スペクトラム ADHD と診断された。
- ・支援学級に1年生のときから入った。先生の対応は支援計画書を作ってくれたが、その活用もできず、先生は毎年変わるためその対応に追われ、子どもは学校へ行けなくなった。
- ・学校へ行けなくなったことの事情に向き合ってくれる先生は、今までの9年間で1人2人くらいであった。
- ・先生は、子どもが学校に行けなくなるについて「何ででしょう？頑張ってるんですよ。きてくれたら一生懸命頑張ってるので大丈夫です。」と言われるけど、それがうちの子にとってはすごいプレッシャーで、「もっと頑張らないけんかった！」とってちょっと自分を苦しめてしまう。
- ・家では自分の気持ちを喋るからきいてあげているが、学校にいった先生と話すと自分じゃない自分を作って、先生に言われたことを、「はい」といって自分を苦しめている。
- ・小5になった頃、昼間でも勝手におしっこが出るような感じで、体に異変も感じていても、それでも先生は何でなんでしょうねと私に聞いてくる。なのでわからないのですかというくらいになり、4年ぐらい前は先生とのバトルをしてしまった。

- ・その時の対応を今思えば、先生は全力を尽くしてくれているんですけど、やはり教員だから教員の目線ではしか対応できないみたいで、先生はわからないと言われた。であるなら、フリースクールや相談窓口、今で言うところの「とつとの森」さんとかの情報を先生側から、なぜ教えてくれなかったんだろうと思う。
- ・結局自分でインターネットを見たり、不登校で行けない子をもつ友達と話して、今どこへ行っているとかの情報を知って動く。
- ・いい先生だったら一生懸命何かを見つけてくれて、その先生が連絡を取ってくれていた。ではなぜ校長は「あれなんだろう」みたいな対応だったのだろう。であるなら一律に学校が、そういう窓口となってほしい。
- ・学校へ行けていない不登校の子は苦しんでいる。しんどくても通ってる子もすごいたくさんいて、爪がもうポロポロになるぐらいストレス抱えながらも頑張っている子もいる。
- ・低学年の1, 2年生の子どもでも、思いを伝えられないことがあったり、学校へちゃんと行かなきゃいけないストレスから、自分を傷つけてしまうこともあるみたい。
- ・今の時代インターネットが普及して、情報がすごいありすぎて子供たちがしんどくなってるんじゃないかなっていうことをすごく感じる。
- ・教育の現場において、フリースクール、相談窓口については、距離があるような対応の仕方をしているので、これからは先生たちが線引きなくオープンにしなければいけないような時代となった。
- ・今年では自殺者が増えた。「毎年増えてるな・・・」ぐらいにニュース見て思っている場合じゃないんじゃないかというのが実際の本音です。

【最後に言いたいこと】

(親)

- ・私はずっと教育委員会に訴えてきたこと、学校にも訴えてきたことですが、学校の先生は、たくさんのお子さんを見ているため、結局、先生も対応に困ったり、先生自体がしんどくなったりしている。そういうところを、結局は子供が子供に向けてしまっているところもあると思う。
- ・今回うちの息子がPTSDになったのも、自分がもういっぱいになって、ついつい暴言を吐いたことがきっかけでPTSDになったので、やはり先生が知識を知らないといけないし、こういう子にはこうした方がいいということを知ってた方がいいと思うし、先生をケアしてくださる方もおられたほうが良いと思う。
- ・各中学校区にスクールカウンセラーの方が、1人か2人配置されていますが、そうではなくてすべての学校に、先生のケアや子供のケアをしてくださる心理士さんとかを各学校に配置してくださることを、ずっと訴えています。何か予算の関係とかによって、いろいろとうまくいかない。
- ・今、中学校区に2人なので、中学校から小学校に曜日を決めて出向いてくださるけど、そうではなくて常駐してくださると、やはり先生も相談しやすいし子供たちも相談しやすいし聞いてもらえるし、気づいてもらえる。気づいてもらえると、そこからどういう対応をしていったらいいのかというアドバイスもいただけるので、このことはすごくお願いしたいところです。

(親)

- ・不登校という問題が起きて、その後をどうケアするのかというのもすごく大切なことですが、そも

そもなぜ不登校が起こるか、学校教育、社会の問題、学校の中などにたくさん問題があって、そこで苦しんでる子がすごくたくさんいるので、まず自殺の問題や、子供たちがどこに苦しんでるのか、そこをそもそも解決していかないとこの問題は良くなりません。

- ・なぜ自殺が起きるのか、自殺したいという子を予防して止めるのも大事だけど、その前をもっと見ないと、不登校が何で起こったのかその前を見ないと何も解決に繋がらないと思っています。
- ・この行政の関わる方たちにそういうことにも視点を置いて欲しいと私は思っていて、それを伝えたかった。

(親)

- ・今、相談できるところとか、繋がる多様な学びはどんどん広がって行って、相談できるところも広がっていると思うのですが、相談だけで終わっているところがすごく多い。ではどうしたらいいのかということ、具体的に私は今日どうしたらいいのかということ、もっと的確なアドバイスがほしいが、アドバイスが「とっとの森」の先生に聞けたらいいけど30分も無い相談時間で2、3ヶ月待ちでどうやって回していくんだ、日々の生活を・・・ということがある。聞いてもらうだけでは終わらない所は、どこにあるのかということをもっと知りたいなって自分は思っています。

(親)

- ・子供がすごく責められた。なんで・・・なんで・・・と。行くところや地域でも、なんで学校に行かないの？ 友達でも、何で行かないの？ 学校の先生でも何人だったかな。本人1人対50人ぐらいに責められてるんですね。では子供が本当に悪いんだろうかって思ったんですけど、別に悪いところって言っても・・・。
- ・先生がやってきてくださいって言うことが少しできませんでした。「ではやってください」と怒られる。そしたらみんなが同じようなことを言う。その繰り返しで、ずっと傷ついていて、6歳で「もう生きていきたくない。なんで生まれたんだろう。」と毎日いっている。
- ・私がそういうことを経験するということは、もっともっとたくさんの方がいると思う。でもなぜそれに手をつけられないし、それを隠すようなことをするんだろうということが、やはり不思議だったのと、調べて愚痴を言いたいわけではないが、本当に誰が助けてくれるんだろうと思う。
- ・この子は将来やりたいことがある。そして大学にも行きたいと言ってる。でも結局それには学校にまた行かなきゃ行けないが、誰がそこを助けてくれるのか、どう繋げてくれるのかと思う。子どもは、働きたいといっている、自分みたいな子を助けていってほしいと願っている。

(親)

- ・学校の話になるんですが、やはり教育現場では教育の先生しかいないので、プラス専門員として作業療法士さんなり、心のケアなど対応する専門の方が学校に1人2人いればと思う。
- ・教員の方も言ったら言ったでプライドも多分あると思うけれど、専門員の受け入れ態勢になってほしい。
- ・専門員の方が小学校のときからいるようにしないと義務教育9年間は子供の将来にとってすごく大事な9年間。
- ・将来に向けて子供たちの未来が明るくなるよう、向き合って協力し動けることは動いていきたい。

■まとめ（Bグループ発表）

- ・ Bグループは、支援を具体的にどうしたらいいのかというところまでは届いていかない、そこまで進んでいかないところもありましたが、参加された保護者の方に1人ずつじっくり話していただいて、それを委員の皆様聞いていただけたことが何よりの今回のメリットと思いました。
- ・ 例えば、保護者が仕事を辞めなければならない状況。それも本当に小さい子どもをサポートしなければいけないということで仕事を辞めざるを得ない状況にあるということを知ってもらえたことや、アウトリーチのことがなくて、家にいてなかなか出られない子供たち、その子供たちが、次の支援としてフリースクールとか教育支援センターに繋がるまでのサポートがなかなかないということに気づきました。
- ・ 家庭訪問はどうかということがありましたが、その渦中にいるときに、その学校との関係で、もう子供が出られなくなってしまう保護者にとっても、負担になるってということもありました。
- ・ 学校では、先生のケアも必要ではないかということも出ました。実際の子供たちがその先生も苦しいということも苦しんでいる。では本当に安心安全な場は、どうやって学校を作っていけばいいのかなって保護者の意見もありましたし、その学校に実際に行けない子供たちは、学校に行けないってということだけでも、苦しんでいます、この周りの理解がないことによって、さらに自分の存在を傷つけている。
- ・ 自分は何で何のために生きているのだろうという子供がいることを伝えてもらいました。
- ・ 教育支援センターの部分でもあります。話も出ましたが、親の会と公的機関が繋がるような取り組みをしていけばどうかということもありましたので、どんぐりの会、頑張っていきますので、皆さんの応援をもとに、教育支援センターや県の教育機関などともこれから意見交換ができるように目指していきたいと思います。
- ・ いずれにしても、地域の子供に未来が持たせるような社会を作っていけたらいいなと思います。

—以上—

令和7年度議会報告会・意見交換会 参加者アンケートの集計結果について

Q1

参加者について

1. 年齢	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	未記入		
	0	0	1	3	1	1	0	2		
2. 地域	鳥取	国府	福部	河原	用瀬	佐治	気高	鹿野	青谷	その他
	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0

Q2

会議について

1. 開催場所	良い	悪い	どちらともいえない	未記入
	8	0	0	0
2. 開催時間帯	良い	悪い	どちらともいえない	未記入
	8	0	0	0

Q3

議会報告会について

1. 時間の長さ	ちょうど良い	短い	長い	未記入
	4	1	2	1
2. 内容	分かりやすい	分かりにくい	どちらともいえない	未記入
	5	1	1	1

3. お気づきの点

- ・資料が分かりやすくイメージしやすかったです。
- ・市議会議員の方の写真と名前が分かるので、市議会と議員の方を身近に感じられました。
- ・議会と委員会の傍聴をしたいと思います。
- ・形だけの議会報告会に思えたので、この時間を意見交換会にあててほしいと思った。
- ・今回の意見交換会に関連する報告かと思っていたが、どうやら違っており不要に感じた。
- ・ホチキスどめの資料をいただいたが、特に中身の説明がなかったように思う。

Q4

意見交換会について

1. 時間の長さ	ちょうど良い	短い	長い
	1	7	0
2. 進行	良い	悪い	どちらともいえない
	7	1	0
3. テーマ	良い	悪い	どちらともいえない
	8	0	0

4. お気づきの点

- ・参加したみんなが意見を言えるよう配慮しながら進行してくださったので、ありがたいと感じました。
- ・みんなの言葉に耳をかたむけて下さって、とても嬉しかったです。
- ・今回はほとんど「聞いて頂いた」状況でしたが、その「聞いてもらった」こと自体がとても有意義に感じ、悩みも心穏やかになり、大変ありがたかったです。
- ・議員の方が、私たちの想いを話す時間を優先して頂けて、とても嬉しく思いました。
- ・意見交換会の時間があと30分ほど長ければ、議員の方の想いをもっと聞けたのかと思います。
- ・もし可能ならば、テーマを分けて第1回、第2回と日程を分けても良いかと感じました。
- ・議員の方の温かいお気持ちを感じ、勇気を出して意見交換会に来ることができて良かったです。
- ・時間が圧倒的に足りなかった。市民の意見をもっと深く話す時間、それに対する議員のコメント、さらにそれについて意見を言い伝え合う時間、すべてが足りず、内容が浅くなってしまう。
- ・今回の内容が多く（多岐にわたる課題）、深いこともあったため、もう少し時間がほしいと思った。
- ・不登校の親の声を耳を傾けて聴いていただき、本当にありがとうございました。その空気感があり、なかなか多くの人の場で話せない方も話すことができました。
- ・時間は短く感じたが、長くしたとしても、今度は集中力が切れたかもしれない。さらに小さいグループにわけて、もっと一人一人が話せる形にすればベターだったように感じる。人前で話すことが難しい（特に不登校の親は弱者でもあり、なかなか意見を胸をはって言いにくい）が、そのような状況でありながら多くの本音の声が聞こえたのは、話しやすい環境を用意していただいた（安心して話してもよいと感じた）のだと思った。
- ・議員の方々が真剣に聞いてくださり感謝している。時間があれば、議員の方々の意見もお聞きしたかった。
- ・意見を真摯に受け止めてくれた事に素直に嬉しかった。
- ・この度の意見の優先順位や、問題解決についてなど、どのように進めていくのか気になった。

Q5

市議会だよりについて

	(人)	(割合)
①よく読む	3	38%
②必要な部分だけ読む	3	38%
③あまり読まない	1	13%
④まったく読まない	1	13%
未記入	0	0%

Q6

市議会だよりに対するご意見・ご要望

・鳥取市LINEで議会だよりを配信する、カテゴリを追加してアクセスしやすくする等、市報（紙）を見ない人にも見もらえるかもしれません。

・議員になった理由など、議員の自己紹介のような特集が見てみたい。議会を身近に感じ、議員に親しみがわきそうに思う。

・議会報告会のように、「議会とは?」「傍聴とは?」「請願陳情とは?」等の仕組み特集→市民の当事者意識を育てる学びになると思います。

・大山町だよりを読みました。（6月議会だよりで記載があったので）雑誌みたいで、文字・写真・図解があり分かりやすいと思います。ページ数が増えても鳥取市も取り入れると読みやすくなると思いました。

・年4回発行を5回にして、定例会号とは違う特集も見てみたいです。

・全体の色合いがあまり良くない気がする。もう少し現代的な、若い人たちも興味をもつような明るいカラフルな配色にしてはどうか。

・写真はカラーの方がいい。議員の写真はその人らしさが見えるものがいいと思う。

・こどもの人権について一度特集をやっていただきたい。ほとんどの方が知らないと思うので。

・他人事であったり、情報が有効だと感じていないのだと思います。自分事、有益な情報にするために、変な言い方ですが、市民が見ないと損をする、と感じたら目を通すと思うのですが。

・文字が多く読むのに体力がいると感じる市民が多いと思う。特に若年層や子育て世代はゆっくり読むことができない。

・市議会だよりが発行されていた事自体知らなかった。

・鳥取市の中高生と一緒に記事を作成したら、もっと見やすく、情報も広がりやすいのではないかと思った。

- ・いつも市民の為にありがとうございます。
- ・議員の方々と直接お話しする機会がなかなかなかったため、貴重な機会でした。
- ・時間を作って頂き感謝申し上げます。
- ・あたたかい言葉をかけてくださったり、困ったら「ここにおいで」などと言ってもらえ、心強く感じました。
- ・パワーが湧きました。
- ・今回お話をさせて頂いたメンバーはまだパワーがある方々です。声なき声も意識しながらお話しさせて頂きました。
- ・これを機会に、市議会につきましても興味が湧きました。ありがとうございます。
- ・意見交換会を今後も毎年開催してほしい。周知として、市報および鳥取市LINE、テレビ等広く幅広い世代に伝わるように工夫していただきたい。良い機会でも知らないことで必要な声をあげるタイミングが得られない。
- ・不登校、学校の学びや子どもとの関わりについて（子どもの人権・福祉・教育など）は同じテーマを共有していると考え。今回のような意見交換会は、毎年行って頂けると嬉しい。10年後の未来を思い描いて実現するためには、今から種をまき、栄養を与え、手入れし、育てる時間が必要と思う。意見交換会にもそれを叶える可能性があると感じている。市議、市民、そして行政担当課も交えて話せる場は理想と現実のギャップを小さくするために大切な対話だと思う。
- ・アンケートをgoogleフォームなどで集計して頂けるとありがたいと思いました。
- ・このような機会を用意して頂き、ありがとうございます。
- ・鳥取市議員の方々にお会いして、前向きな方が多いのだということがわかりました。
- ・今回は「不登校」に関わるテーマに興味を持っていただき、感謝しております。不登校はかなり少数派で、学校へ通うという常識から外に出ているためか、親や子の意見は小学校や教育委員会へ伝えても、何も手ごたえがなく、言ってもムダだと沢山のあきらめを重ねてきている家庭がほとんどです。その中で今回、一部ではありますが、困ってきたこと、変えてほしいこと、疑問に思っていることを伝えることができたのは、不登校の家庭にとってとても大きな進歩でした。これをきっかけに、この活動を続けていき、不登校を通しての困っている事の解消や、学校へ通ってはいるけれどもとても苦しさを抱えながら通っている子どもたちが生きやすくなること、不登校であるなしに関わらず自殺や自殺を考える子ども（大人も）を根本から救い上げること等、日本の社会全体が赤ちゃんから大人までがなぜ生きづらさを感じているのか、社会のどこを根本的に変える必要があるのかを、アイデアを出し合い、実行へ結びつけていけたらいいなと心から願っています。それには議会の力が必要です。
- ・自分達の自治体の政治に興味関心を持つ人が増えたらと願います。選挙終わったらお任せというのもどうか…市政について気軽に考えたり対話したりする場がもっと増えればと思います。
- ・なかなか情報に気づけずにいることが多いので、トリピーメールのように登録したら通知がくるみたいなこと（他にもいい方法があればそれを）があったらとふと思いました。
- ・今回意見交換会をして直接お会いして話ができただけで、とても身近に感じることができました。オンラインの活用も考慮に入れつつ、顔を合わせて対話することのよさを広めていけたらと思います。
- ・市議会を開いてもらわなくとも、保護者の声が上がられるとありがたいと思います。
- ・フリースクールや居場所、学校が集約してあげられたらなおいいのですが、孤立している家族が直接声を拾ってもらえるシステムが作られたらと思います。
- ・今回の声は本当に一部なので、子どもも大人も安心して生活でき学びが補償される鳥取市になるために、「困っているので助けてください」、という声が届く方法、また聞いてもらうだけではなく、具体的に解決してもらえる（アドバイスもらえる）システムが必要だと思っています。
- ・市民の声を積極的に取り入れる議会を望みます。
- ・市民の声が現実化されるまでの具体的な計画やビジョンを明確化してほしい。
- ・通った意見が現実化された時の市民の感想も知りたい。